

348) ひとり芝居

出逢った日から君のこと 心の奥で想ってた
花の季節が過ぎるころ 初めて君と瞳が合った
くちなしが咲くように ひっそりと恋をして
さよならが近いこと 知りながら愛してた

かわいた砂がとめどなく 涙の^{しずく}滴 吸いこんで
季節の^{とき}流れの空しさは 海の^{あお}碧さに溶けてゆく
ジェラシーの稲妻が ^{たそがれ}黄昏を駆け抜けて
夏の日の^{さかかぜ}逆風に 今日の日が暮れてゆく

同じ哀しみくりかえし 同じ涙をふきながら
人の^{さだめ}運命に流されて 一人芝居を演じてた
あきらめに散ってゆく 白い花また一輪
倅せはいつだって ひとときの気迷いよ

夢の隙間に忍びこむ 君の姿のまぶしくて
出逢ったころの思い出が 心の襷に突き刺さる
この道を歩くたび よみがえる絶望に
今はただ歳月の 優しさがありがたい